平成２６年度研究協議会資料

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 都道府県・  指定都市番号 | 40 | 都道府県・  指定都市名 | 福岡県 | 研究課題番号・校種名 | ２　高等学校 |
| 教科名 | 看護 |
| 研究課題 | ○生徒の主体的な学習を通して思考力,判断力,表現力,技能を育成する指導方法等の工夫改善と学習の実現状況の把握についての研究 | | | | |

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| （生徒数） | （１１４６人） | |
| 所在地（電話番号） | 福岡県北九州市八幡西区堀川12-10 (093-602-2100) | |
| 研究内容等掲載ウェブサイトURL | | http://www.orioaishin.ac.jp/ |
| 研究のキーワード　思考力　表現力　発表体験　コミュニケーション | | |
| 研究成果のポイント  授業と並行させ, 実習記録の課題練習・「実習マナー」テキストの要約・「実習用ポケット手帳」の作成は,生徒の思考力・判断力・表現力を向上させ自己効力感を高めることができる。また,生徒にグループ単位で発表体験をさせる過程のなかに主体的に専門分野の基礎的・基本的な知識・技術の定着を図り,コミュニケーション能力や豊かな人間性を身に付けた人材を育成する要素がある。 | | |

１　研究主題等

（１）研究主題

|  |
| --- |
| 基礎看護の授業を通して思考力,判断力,表現力,技能を育成する指導方法の工夫改善についての研究 |

（２）研究主題設定の理由

　本校の多くの生徒たちは,臨地実習において実習内容を言語化することに苦手意識がある。また、臨地実習での指導者・患者との関係を築く過程や主体的に学習することに乏しい状況がある。よって，臨地実習前に教科指導のなかで改善できることを明確にし, 思考力,判断力,表現力,技能を育成する指導方法の工夫改善を図りその指導方法を規準化する。

（３）研究体制

看護科教員全員で取り組む。研究の責任者を２名とする。学習との関連において看護情報活用で,発表ツールであるパワーポイントの作成の仕方を指導内容に加えた。

（４）１年間の主な取組

|  |  |
| --- | --- |
| 平成26年度 | ・「実習マナー」テキストの要約・看護技術「実習ポケット手帳」の作成をさせた。  　※看護技術「実習ポケット手帳」は25年度冬休み課題  ・１年生から引き続き, 校内実習記録用紙を使用し授業の進度毎に記録の課題に取り組ませた。   * 臨地実習前に,臨地実習用記録用紙を用いて日常生活を基にした記録,家族を対象とする記録の課題に取り組ませた。   ・生徒に,実習前に学校内教員を患者役として血圧・脈拍測定を実施させた。  ・血圧・脈拍測定実施後,生徒と教員へのアンケート調査を実施し生徒自身に今後の課題を考えさせた。  ・学校見学会で中学３年生を対象にベッドメイキングのデモンストレーションを実施させた。  ・中学校での出前授業で血圧測定のデモンストレーションを実施させた。  ・前半臨地実習終了後の生徒へのアンケート調査を実施ならびに評価。  ・校外でのボランティア活動ならびに終了後のアンケート調査実施・評価。  ・文化祭でボランティア活動の体験から学んだことを発表させ,文化祭で一般参加の人々を対象に血圧測定を実施させた。  ・後半臨地実習終了後の生徒へのアンケート調査を実施ならびに評価。 |

２　研究内容及び具体的な研究活動

（１）研究内容

・看護科２年生 91名専門分野Ⅰ 基礎看護の看護技術２単位が研究対象である。

**1)思考力・判断力・表現力を高める。**

①校内実習記録用紙を使用し,実施した内容からの気づき,学びをもとに実習記録に取り組ませ思考力を高めることを目的とした。校内実習記録用紙は,看護援助に目的・原理・原則があり全ての援助が科学的根拠に基づいて実践されていることを生徒が理解できるようにレイアウトした用紙である。看護援助の中で,生徒が気づきや予測されることを考え状況を判断できるように取り組ませこれを毎回課題とした。

②臨地実習記録用紙を使用し日常生活を基にした記録と家族を対象とする記録に取り組ませた。

③臨地実習前に,生徒に「実習マナー」テキストの要約・看護技術「実習ポケット手帳」の作成をさせた。

④戴帽式の,歴史ならびに意義の調べ学習をグループ単位で取り組ませた。

⑤夏期休暇中,既習の学習内容を活かし体験活動としてボランティア活動（社会福祉施設,児童福祉施設,幼稚園等を生徒自身で交渉）に取り組ませ,その学びを評価させグループ単位で文化祭の場で発表することに取り組ませた。

⑥学校見学会・中学校での出前授業において,生徒が学んでいる看護技術の内容を中心に中学生を対象に分かりやすく説明することに取り組ませた。

**2)技能を高める。**

①前半臨地実習前に血圧・脈拍測定を実施させた。患者役には普段身近に関わる機会ができるだけ少ない看護科以外の教員を選んだ。なお,生徒には一人あたり教員10名を患者役として血圧・脈拍測定に臨ませた。文化祭で一般参加の人々を対象に血圧・脈拍測定を実施させた。

（２）具体的な研究活動

1)―①授業の中で学習項目毎にその意義・目的・方法・根拠を常に意識させるた

め校内実習記録用紙を使用し記録することに取り組ませた。

②臨地実習に備え, 行動計画・目標の立て方を理解させるために臨地実習用記

録用紙を使用させ,生徒自身の日常生活を基にした記録,家族を対象とする記録を宿題として課題に取り組ませた。

③「実習マナー」テキストの要約・看護技術の「実習ポケット手帳」の作成を

させた。

④戴帽式に向けて,生徒たちに戴帽式の歴史を調べ学習として取り組ませグループ単位で発表をさせた。この調べ学習の中で,戴帽式の起こりがキリスト教の修道女がいばらの冠をかぶり生涯を神に仕える誓いを立てたことに由来したものであることを知り,生徒も戴帽式を前に職業としての看護職の使命感に決意を新たにしていく。この学習過程を通して生徒が自分自身の内面を見つめ表現力を高めることを意図した。

⑤１年次にボランティア講習を受け、夏休みを利用して生徒自身でボランティア活動をしてきている。引き続き２年次でも夏休みに生徒自身でボランティア活動に取り組ませた。この取り組みは,特に臨地実習において指導者・患者・実習のメンバー等での関係性を築くことに主体性が足りない傾向にあることを克服させる契機となることを期待した。また,既習内容であるコミュニケーションを生徒に取り組ませるために学校以外の他施設を活動の場とした。その後,グループ毎で取り組みをまとめさせ文化祭で発表をさせた。文化祭での発表の場は,上級生をはじめクラスのメンバー以外の人たちの前で発表をさせることに表現力を伸ばすことを期待した。

⑥中学３年生を対象とする学校見学会において,生徒が中学３年生にベッドメイキングをデモンストレーションした。ベッドメイキングは１年次に履修した内容である。臨地実習を控えている時期に基本となるベッドメイキングを復習する手段として中学３年生を対象にデモンストレーションに取り組ませた。このデモンストレーションは技能を高めること,表現力を高めることをねらいとした。中学３年生を対象とする出前授業に２人一組で生徒を参加させた。出前授業において看護科で学習しているヴァイタルサインの測定を生徒が中学３年生に説明ならびに実施に取り組ませた。各中学校から依頼を受ける中で該当中学校の出身者を優先的に選んだ。この取り組みは,既習事項を生徒自身が看護技術の基本的事項である技術の根拠となる学習内容を,中学生を対象とした内容にすることである。生徒が準備・作成したものを教員が確認をした。説明が終わったあと生徒が現在どのような学校生活をおくっているかを,中学生を対象に話す時間を５分間設けた。この取り組みは,送り出された中学校側に生徒の成長をみてもらい,生徒自身も後輩たちを前にして先輩としての自覚をもつことをねらいとした。

2)―①臨地実習開始前に,血圧・脈拍測定に取り組ませた。生徒には看護科教員以外の教員を患者役にして10人を測定することを目標とさせた。生徒には血圧・脈拍測定の到達目標を確認させ実施させた。この教員を対象とした測定と文化祭で一般参加の人々を対象に実施した測定を通して,生徒自身に臨地実習に臨むにあたっての課題を考えさせた。この測定をしているなかで,予期しない質問を受けて対応できない体験をすることで生徒が自分の課題を認識していく場になった。また,この体験から多くの生徒に共通している課題は,患者・指導者とのコミュニケーションを図ることであった（アンケート調査結果31.8%）。10人を測定し終えても,生徒が最も苦労したことは,コミュニケーションを図る場面であった（アンケート調査結果15.9%）。

３　研究の成果と課題

（１）成果

・校内実習記録の課題練習・「実習マナー」テキストの要約・「実習用ポケット手帳」の作成は,生徒の思考力・判断力・表現力を向上させ生徒の自己効力感を高めることができる。このなかで実習記録の課題練習は90%の生徒に練習を活かすことができ達成感に繋がっていることを確認できた。生徒の自己評価ならびに臨地実習記録内容においても成果が表れている。

・戴帽式の意義やナースキャップの歴史的流れの調べ学習を経て,実習施設の現場で職員の看護師がナースキャップをつけない理由を生徒自身も実体験のもと共通理解している。例えば,ナースキャップの先端が確かにカーテンなど物に当たりケアがしにくかったなどのことを意識している。また、生徒は自分たちがキャップをつけていることで,患者に実習生であることを知ってもらうためには印になると捉えている。このように意義や歴史を知り体験をすることは生徒の関心が広がり思考力を育成する要素となっている。

・血圧測定の技能を高めるため,血圧・脈拍測定での患者役を生徒ではなく、本校教員である成人を対象に実施した。その結果初回に比べて10回目で明らかに技能の向上ならびに表現力を高めることができた。

・ボランティア活動を通しての学びが臨地実習に活かされているかをみると,65.2%の生徒には活かされている。体験の場で臨機応変な対応を求められることが,生徒に主体的に実習に取り組む姿勢・態度に効果的な影響を与えていることが分かった。また、生徒にとって苦手とするコミュニケーション力を育成する場となったことが生徒への調査から分かった（39.6%）。

　・学校見学会,中学校での中学３年生を対象にしたヴァイタルサインの測定においては,中学生が興味や関心を示してくれるように,説明する内容を何回も検討する過程が生徒の学びを深くしている。どの生徒も学校行事や公の場で奉仕することに骨惜しみすることがなく喜んで積極的に参加している。

（２）課題

前半の,臨地実習前の生徒の不安で最も多かったのは,患者・指導者とのコミュニケーションが図れるかどうかであった（58.2%）。４か月後の後半の,実習前の生徒の不安で最も多かったのも,少し改善されたかに見えるが同様にコミュニケーションに関するものであった(37.4%)。生徒はコミュニケーションを図る上での態度で必要なこととしての知識は定着している。実際に患者とのコミュニケーションを図るとき,生徒が難しいと感じていることは,援助を実施するときの言葉かけや難聴のある患者との会話である。指導者とのコミュニケーションを図るときは,丁寧な言葉遣いや質問をするときのタイミング,報告・連絡・相談が思うように運ばないことが難しいと感じている。教員とのコミュニケーションは指導上接する時間が多いためかほとんど問題はなかった。今後の課題として高校生らしく誠実な態度で相手を尊重した態度でコミュニケーションを図ることができるよう授業のあらゆる教科活動のなかでさまざまな機会を得て取り組ませていく。

（３）研究２年目へ向けての取組

今年度研究１年目で,生徒の思考力・表現力・技能を育成するための研究成果が見えてきたのでこれを継続させ今後の課題と合わせて指導に取り組む。これまで担当教員の力量に委ねられた状態で授業を展開してきている。この研究を契機として生徒の学習を保障するためにも指導方法の標準化に取り組む。